



めいほうキャンプ場（旧「大谷森林キャンプ村」）を引き継ぎ、事業拡大を果たした大塚義弘さん

## 継ぐ事業・起こす事業

### 地域の生業を引き継ぎ地域の資源を生かす価値

飲食店や建築関係、製造業、農林業、観光に関わるサービス業など、郡上市には多くの分野でさまざまな仕事があります。これらは地域にとって大切な仕事ですが、後継者がおらず廃業を余儀なくされるケースが増加傾向となっています。一方で、郡上市では、新しく事業を起こす「創業者」が増えているという状況もあります。今月号では、事業を引き継いでいく「<sup>けいぎょう</sup>継業」と事業を起こす「創業」の2つに焦点をあて、事例や制度を紹介しながら、今後の方向性を探ってみました。

#### 地域支援員を配置し 事業継承の制度を充実

市商工会が事務局を担っている事業承継支援センターでは、市内で後継経営者を探している人と郡上市で起業したい人、また、事業の規模を拡大したい人のマッチング事業を進めています。

事務局を務める商工会事務局次長の「柳希毅さんは、「市内の事業所で後継者がおらず、やむを得ず、廃業される人が増えています。商売を引き渡したい人、そして何らかし事業を引き受けた人、双方の登録者は増加傾向にあります。すぐにマッチングに至るといふ訳ではありません。」と、橋渡しの難しさを話されました。

引き渡し希望者と引き受け希望者とのマッチングを図ることの難しさがある中で、一柳さんは、「マッチングが成功し、事業拡大をしている取り組みもあります。事業承継は、後継者の確保に悩む企業の経営者だけの問題ではないので、地域経済の活性化に結びつくよう、今年から地域支援員を配置するなど事業承継の制度を充実しました。」と、きめ細かく相談に応じる体制を整備していることなど、こ

の取り組みの大切さを強調されました。

#### マッチングにより施設を 引き継ぎ事業を安定化

めいほうキャンプ場（旧「大谷森林キャンプ村」/明宝大谷）を運営する大塚義弘さん（大和町）は、事業承継支援センターの制度を活用してマッチングが成功し、年々事業を充実させながら経営安定を図っています。

めいほうキャンプ場は、もとも明宝大谷地区の山林所有者による組合で運営されていましたが、施設の老朽化や実際の運営に携わる組合員の減少などで、存続が難しくなっていたところ、事業承継支援センターによりマッチングが行われました。

事業承継を受けて今年で5年目の運営になる大塚さんは「10年間郡上で自然体験に関わる仕事をする中で、いつかは自分で運営をしてみたいと思っていました。そんな時、大谷森林キャンプ村の話が届き、施設を引き継いで創業する気持ちが高まりました。」と、最初のきっかけを話されました。ただ、施設は古く老朽化への対応を含めて不安要素はいくつかあったそうです。それでも、「事業承継支援センターからアドバイスをいた

## 事業承継 支援センター の取り組み

### 引き渡し希望者と創業希望者をマッチング



横山真也さん（白鳥町）は、事業承継支援センターのマッチングにより、今年2月から事業を引き継ぎ起業をされた一人です。

市産業支援センターへ創業の相談に行ったのですが、早々に「事業承継支援センターにつないでもらい、とんとん拍子で話が進みました。」とのこと。その後、廃業を考えていた自動車修理関連の個人事業者とのマッチングが実現し、現在、ご自身の板金塗装技術を生かした事業を展開されています。

だいたり、手作業で施設の改修を行ったこと、そして、これまでなかった体験メニューを増やしたことで、毎年100組ほどお客さんは増えています。」と、事業承継支援センターの協力や自身の運営等について話されました。

今ではメインターゲットをファミリーに絞り、夏場の3か月ほどだった営業期間も4月中旬から11月下旬までの7か月間に延長されました。「まだまだやりたいことはたくさんあります。地元での雇用創出や経済の活性化にも貢献したいです。」と、その胸の内を明かされました。

### 「創業塾」を開催して新規 創業者を後押し

市商工会では、今年度も創業塾を開催します。創業塾は、地域の経済や雇用を支える基盤を強めるため、新たに起業を目指す市民を対象に開かれるもので、今年度は11月に5回の開催を予定しています。既存の事業者の人も受講できます。また、市産業支援センターにおいても、通常の窓口業務として創業希望者の相談を受け付けていますので気軽に相談ください。（市商工会／66・2311 市産業支援センター／66・2850）

### 自分のやりたいことが 母袋なら実現できる

小さな集落で新しい仕事づくりが動き出しています。「自分のやりたいことが母袋なら実現できる。」と平成28年度に大和町母袋地区に地域おこし支援隊として移住された吉田



小野木淳さん（左）と吉田雄輔（右）さん／大和町母袋地区で

## 大和町母袋地区で創業

### 産業支援センターや商工会のアドバイスで実現

雄輔さんは、移住後3か月ほどで自分の思いが確信に変わったそうです。そして先月7月7日に、簡易宿所である「とまりぎ山ノひやくせい」がオープンし、本格的に営業を始めています。この取り組みは、市の地方創生事業である「郡上カンパニー（5ペー

ジ参照）を活用し、平成30年度にパートナーとして小野木淳さんを迎え入れ、「創業」を目指して事業を進めてきたもので、吉田さんは「宿泊施設としての機能だけではなく、多くの人が交流を深める場所にしていきたい。」と、今後の抱負を語られました。

### コミュニティの中で生かされる仕事をしたい

小野木さんは、「母袋は山間で何も無いように思われがちですが、自分にとってはすべてがそろっている場所です。事業は立ち上がったばかりですが、これからもコミュニティの中で生かされる仕事を続けていきたい。」と地に足をつけて活動する意義を強調されました。

2人とも起業には不安があったのですが、母袋地区のみなさんの心温まる応援や、郡上カンパニーの人脈が深まっていく中で徐々に不安要素が取り払われたそうです。事業計画づくりや資金調達については、産業支援センター、商工会から親切丁寧なアドバイスをもらうことができたそうです。



## 石徹白の農作業着「たつけ」を商品化

### 「暮らしの知恵」を生かして創業

石徹白洋品店

#### 石徹白にあるものを使って仕事を起こしたい

平成24年5月、白鳥町石徹白地区に「石徹白洋品店」がオープンしました。

お店を営営する平野馨生里さんは、平成23年に石徹白地区に移住し、「石徹白で生きていくために石徹白ならではの仕事を創りたい。」と、考えていた際、地域で農作業着として使われていた「たつけ」に魅かれ、自分の中でやりたいことが明確になったそうです。また、「畑で藍を育て、糸を紡ぎ布を織って藍で染めることで、地域の誇りや暮らしの知恵を伝えていきたい」というぶれない軸が平野さんに生まれました。

石徹白洋品店は、移住者の獲得にも貢献しています。平野さんは、「既存の仕事ではなく、ワクワクするクリエイティブ（創造的）な仕事を生み出す原動力が石徹白にあります。私たちがの仕事だけではなく、石徹白という土地や人の魅力が移住者を引き付けていると思います。」と、その理由を話されました。

#### 郡上カンパニーを1年で卒業し石徹白で就労

平野さんは、平成29年に3ページで紹介した吉田さんと同様に、「郡上カンパニー」に応募し、平成30年度からパートナー1名と新規事業にもチャレンジされています。パートナーとして石徹白に移住し活動を始めた諏訪裕美さんは、「石徹白洋品店はリピーターが増えています。石徹白の環境を含めて商品の価値に反映できる。そして、このことが商品を購入してくださる



蚕を育て、糸を引き、その糸で布を織るプロジェクトに挑戦中

お客さんとの関係性の深まりにつながっています。」とリピーター増加の理由を説明されました。諏訪さんは、プロジェクトの期間である3年を待たず1年間で郡上カンパニーを卒業され、今は石徹白洋品店の生産管理やパターン制作を担うなど忙しい毎日をご過ごされています。

#### 地域社会と密接につながった新たな仕事づくり

農作業など普段の仕事着として昔の人が使っていた「たつけ」などの野良着は、布の使い方や体の動かしやすさなどすべて理にかなった服です。これらの服に現在のデザインや色の付け方を工夫し、見事にファッション性を高めた石徹白洋品店の取り組みは、地域社会と密接につながった新しい「創業」のあり方を示した好例といえます。



平野馨生里さん(前列中央)、諏訪裕美さん(前列右から2人目)と石徹白用品店で働くみなさん(7月14日に完成した石徹白洋品店の事務所や工房機能が入る拠点施設の前で/白鳥町石徹白下在所)



### ものづくり底上げプロジェクト

かみ ちから たい すけ 上村大輔さん  
おつか 小 容子 さん 大家



### 八百屋つき下宿プロジェクト

はや ちから 拓 紀 さん 早坂  
き 村 聖 子 さん 木



### Campingなカフェプロジェクト

かわ ばた 孝 哉 さん 川端  
かね 金子 あゆみ さん



### 明宝ジビエブランド化プロジェクト

なか じま 幸 夫 さん 中島  
もと みつ 真 道 さん 元満



### 明宝小川プロジェクト

おほ 橋 俊 介 さん 大橋  
にし わき 洋 恵 さん 西脇

## 移住+起業 郡上カンパニー

「郡上カンパニー」は、移住者が郡上市に定着して市民とともに「地域に根ざした仕事」をつくる取り組みです。今年度は5つのプロジェクトがスタート。昨年度と合わせ、現在10のプロジェクトが動いています。詳しくは、市長公室政策推進課まで。☎ 67-1844

### コミュニティ ビジネス

## 自分たちで地域を 経営するという発想

### 地域を経営する合同会社 西和良村を設立

株式会社や有限会社といった「企業」で事業を継承したり、新しくビジネスを起こす形態ではなく、NPO法人や地域づくりの任意組織として、コミュニティ（地域社会）が抱える公共的な分野で活動する団体が郡上市で増えています。

「西和良まちづくり協議会」は、平成28年10月に組織された任意団体です。市の「提案型協働事業」を活用し、平成30年度からミニデイスービス事業や茶話会の運営を行っています。会長を務める池戸郁夫さんは「まちづくりの活動はたいへんですが、その分やりがいもあります。ミニデイスービスの事業など、これまで外に出る機会が少なかったお年寄りのみなさんからはたいへん喜ばれているので、今

後は利用者を増やしていきたい。」と話されました。課題として、「継続させるための資金と人材の確保」を挙げられ、このことを解決する手段として、平成30年10月23日に「合同会社西和良村」を設立されました。「西和良まちづくり協議会」の取り組みでもあった「農業、観光、福祉、民泊、6次産業」の5つの部門を、

合同会社において地域経営の視点を組み入れ実施する流れをつくられました。現在、会社経営を本格化していくための準備をされているそうで、「これまで使われていなかったり、注目されていなかった地域の資源を見つめ直し、これらの資源を最大限に生かしていきたい。」と今後の事業拡大に期待を込められました。

### 地域における新しい形の 創業や雇用を創出

「西和良まちづくり協議会」



西和良まちづく協議会の池戸郁夫さん

の特徴は、地域づくりの分野では意識が薄かった地域経営の考え方を基本に、地域にお金を落とし、そのお金を地域で回しながら地域社会全体を豊かにしていくという発想です。「合同会社西和良村」の本格的な経営はこれからですが、小さな集落を持続させていくため、ビジネスの手法で地域の課題解決を図るとともに、地域の人材や、使われていない施設を活用し、こうしたチャレンジに共感する都市部の若者を取り込みながら、地域における新しい形の創業や雇用を創出する「西和良まちづくり協議会」の取り組みに注目が集まっています。